

宋詩の人生観・悲哀の止揚

「宋詩概説」（吉川幸次郎）より抜粋

中国の詩が抒情の素材を、歓喜より悲哀に選ぶことは久しい習慣であった。漢代以後、人間を絶望的な、悲哀に満ちた存在だとみる見方が詩の基調となり、希望より絶望を、幸福より不幸を、歓喜より悲哀を歌うのが、惰性的な、しかしそれだけに強い習慣となった。

習慣は唐詩に至っても清算されず、杜甫は「詩經」的な樂觀の回復を信条とし、李白もそれに近いが、絶望と思える人生から、いかにして希望を引き出すか、この葛藤が、唐詩の緊張を生んだ。しかし、人生を希望有るものとしてみたいという宿題を解決するには達していない。それ故に、多くの熱情の言葉を吐いている。

この宿題を解決したのが、宋の詩人たちである。宋詩には悲哀の詩が少ない。或いは悲哀を歌っても何がしの希望を残す。このような転換の中心となったのが蘇軾である。唐詩と宋詩の違いは次のように言えるだろう。唐詩は宋詩の如く生活に密着しない。又、唐詩はほとんど哲学を語らないが、宋人は哲学をあらわに、大量に語る。もっと大きな違いは、悲哀の止揚の有無である。宋人の詩は悲哀を止揚するのに対し、唐人の詩は悲哀に富んでいる。悲哀、というより絶望を歌うのを職掌とするが如くである。

「江月照我心」（藤州江上夜起對月贈邵道士第一句）の詩では、流罪からの帰途にあったとはいえ、政局の前途は予測しがたく、無条件に蘇軾に有利ではなかった。しかし、そうした個人的な悩みを吹き飛ばすべく、大きな樂觀が詠われている。